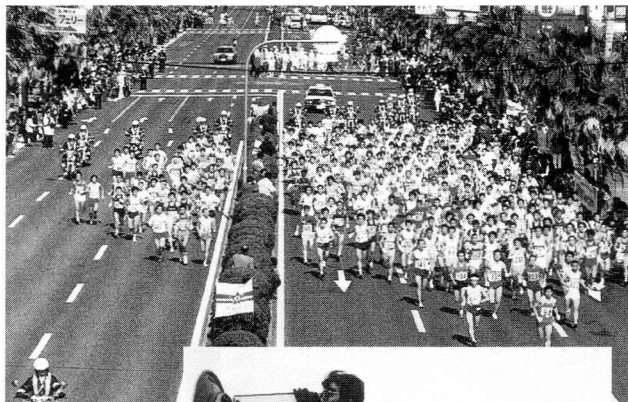


マラソン中継事始め

塩月 清 (OBS)

みん
な
の
話
ら
う
民
放
史

題字 中川 順



民放テレビ初中継の別大マラソンのスタート(1980年)



中継車上のカメラとFPU

写真提供：
大分放送

毎年11月の中頃から春先まで毎週のように、日本のどこかでマラソンや駅伝が行われ、どこかの放送局がテレビの生中継を行う。今やロードレースのテレビ中継はごく当たり前のようになった。

26年前(1979年)、TBS 東京放送・RKB毎日放送・OB

分 S大分放送は共同制作で「別府大分毎日マラソン」をテレビで完全生中継して、マラソンブームの口火を切った。

当時、国内のマラソンと言えば福岡国際と琵琶湖、それに別府大分の三つが公認されていた。その中で、福岡国際と琵琶湖はNHK

がテレビで中継していた。マラソンのテレビ中継はまさにNHKの独壇場だった。

この別大毎日マラソンは1951年から行われているが、当時は現在と逆に、別府市の別府国際観光港をスタート・ゴールとし、大分市鶴崎三佐で折り返すコースであった。

このコースは比較的平坦で、風光明媚な別府湾岸沿いに走る記録の出やすいコースと言われ、新人のランナーには走りやすい、いわば新人の登竜門だった。

1978年第27回大会で地元大分出身の宗茂選手(旭化成)が、当時国内最高の2時間9分56秒を出し、初めて10分を切るという驚異的記録は俄然注目を集めた。OBSではラジオ大分の頃からラジオ生中継を行っていたが、この大会終了後、にわかにテレビ中継の話が持ち上がって来た。

当時私はOBSの制作技術部長で、上司から来年のマラソンはJNN系列でテレビ中継する事になりそうだと、その時は地元局として「君が中心でやってくれ」と言われ、思わず「エッ！テレビですか」と声を出したことを覚えている。

当時のNHK関係者は、マラソンはNHKだと言う意識が強く、マラソン関係の会議でTV中継の話が出て「民放には無理ですよ」と言われる始末だった。私はこの時の関係者に一泡ふかしてやろうと心に秘めてこの民放初のテレビ中継に取り組んだ。

TBS、RKB、OBSの技術関係者が集まり、コースのチェック、移動中継の方法などを具体的に検討した結果、大分市の中心部を従来のコースから少し変更すればテレビ中継が可能と判断しゴーサインが出た。機材については取りあえず3社の機材を総動員しようということで具体的な計画がスタートした。

マイクロ中継網構築の苦勞

しかし地方局の我々に機材も人も十分あるわけがなく、事前準備とマイクロ中継点の確保、関係者との交渉が主な仕事となった。

マラソン中継でいちばん大事なのはいかに効果的なマイクロ中継点を確認するか、ということ。機材とスタッフの数、それが直接制作費に跳ね返ってくることになる。

当初、地元でもありと軽く考え

ていたが、実際動き始めると、土地勘があるとはいえ、次々に難問の端から端に飛び移ったり、半ば腐ったはしごでペントハウスに登り、震えながら降りてきたり、いま思うとゾツとする。当時は若さもあって、初めてのマラソンテレビ中継をなんとか成功させようと必死であった。

大分の地に生まれ育った私は関係官庁、NTT、電力会社に友人、知人がいて、面倒なこともスムーズに話を通り、地元の有り難さを痛感した。あるビルなどはそのオーナーが「君は俺の後輩か、じゃあいつでも使え。このビルがある限り無条件じゃ。他の社には貸さないから」と言ってくれた。

しかしすべてがこのようにうまく行ったわけではない。ある時は、マンションの管理人の娘さんから私の家に電話が掛かり、家内が散々お叱りと嫌みを言われ、翌日彼女の出勤前にお詫びの菓子箱を持って行って、なんとか屋上を使わせて欲しいと平身低頭で頼み込んだこともあった。

大分では高層ビルもなく適当な所に手頃なビルがあり、マイクロ

中継点としては最適な場所を借りることが出来た。

事前の交渉がすべて解決、いよいよ中継の技術テストが始まった。マラソン中継の最大問題点、移動中継のノウハウが我々には全く無く、まさに手探りで何度も何度もテストを繰り返した。移動中継に適した800MHzの機材が民放にはほとんど無く、やむを得ずマイクロ波をつかって移動中継のテストを繰り返した。ヘリコプター中継も検討したが真冬の強い季節風の中では確実性が低いため、中継はすべて移動車からマイクロで各受信点に送られた。

FPUを使ったことのある方ならお分りと思うが、マイクロ波を車で移動しながらそれも40キロ、時間にして2時間余り映像を送る



別府湾を背に移動中継車群

のは至難な技であったが、RKBの技術陣は見事にやり遂げた。

移動中継のテストでは、映像の乱れが起きる現象の一つひとつを解明しながらテストを繰り返した。面倒なのは歩道橋対策。コー

ス中に6、7カ所あり、これによる映像中断を何とかしようと工夫したが、結局歩道橋までは走行方

向の後ろ側で受信し、橋の下からは前方方向で受信するしか方法は

なかった。そのため移動車にはFPUが2台、操作する人も2人要

ることになった。映像が乱れるのは、歩道橋だけでなく、小さな道

路標識でも正面に入ると映像断で使えなくなり、市街地での移動中

継の難しさを思い知らされた。

最終的には送受信合わせて40台近くものFPUが必要になった。

それでも機材が足りず、一部では同軸ケーブルを2カ所、1200

mを電柱に架設した。このうち1カ所は中波の送信所の近くで、直

接変調波形が読めるくらいレベルであわてて地面に這わせたり、

テストでは異常がなかった同軸ケーブルに総合リハーサルでは何故

かノイズが出て、本番前日あわてて道路上に張り直す始末だった。

原因は音声用中継用のVHFや連絡無線、はては警察、自衛隊の電

波がケーブルの真下を通過するためだった。次の年から、この問題は光ケーブルを使って解決した。

積木細工の共同制作体制

なんとか中継の目途もたつた。

TBSがスイッチングセンターを担当、センター車をOBS本社

のスタジオ横に持ち込みマスター経由でTBSに上った。RKB毎

日が移動中継車。OBSがスタートゴールを担当することになった。

この3社に加えカメラ、FPUの不足をカバーするためRKB熊

本放送からもスタッフと機材の協力を仰ぐことになった。最終的に

中継補助員も加え総員146名、機材は次のようになった。

中継車4台

(センター車 移動中継車含む)

カメラ12台

FPU送受信合わせて40台

固定放送席5カ所

マイク口受信点13カ所

放送台本には以上のようになっていたが、機材はもちろん、電波

の不足が深刻だった。RKBも含めた4社の電波を使ったが、各社

ともレギュラー番組を休むことも出来ず頭の痛い事だった。連絡無線は制作と技術に2波使い、無線機は何台あっても不足で、受信専用の受令機をマイク口受信基地に配布した。無線以外にも専用回線を各出先に引いて打ち合わせ回線とした。

マラソン中継に限らず、制作現場ではインターカムの良否が番組の出来を左右することはよく知ら

れたことであり、映像音声の本線のシステム以上にコミュニケーション

システムが構築が困難だった。当時は、携帯電話はもちろん、

自動車電話すらなく、無線機は各社で準備し、有線の連絡回線をNTT、それも別府・大分・鶴崎と

3電話局に専用回線を申請した。

まさに積み木細工の組み立てに似ていて、どれかひとつでも壊れ

たら、全てが水の泡という状態で本番を迎える。

本番5日前、TBS、RKB、RKBの機動部隊が別府観光港に

集結しスタンバイを開始した。この日、別府は裏山の鶴見岳から吹

き下ろす風で、機材をセッティングする我々を悩ませた。強い風と

冷たい雨の中、夕方薄暗い中で78

芯のカメラケーブル300mを国道の側溝に敷設したが、そのつらさは今でもスタッフの語り草になっている。

いよいよ本番に向けリハーサルが始まったが、手直しの連続。なにしろ積み木細工だから、こちらを触れば、あちらがはみ出すの繰り返し。電柱に架設した同軸ケーブルを急遽地上に這わせたが、土木事務所も大目に見てくれたのかクレームもなかった。ランスルーのリハーサルでは送り返しの音声が必要とのこと、急遽音声モニターにOBSの連絡無線の基地局の電波を使った。このため3時間近く基地局の送信機が連続送信状態となり心配したが、さいわい旧式の送信機なので終段出力に真空管を使っていたため、長時間の連続送信に耐えてくれた。

本番、そして大成功！

1979年2月4日本番当日、朝6時、現場について愕然となった。スタート・ゴールの放送席が屋根もろとも強風で倒壊していた。さいわい放送機材は夜間外してあり、あわてて業者を呼び出し手直して事なきを得た。裏山の鶴見



ビルの屋上のマイク口中継点

岳からの吹き下ろしが想像以上に強く、パラボラもすべて方向調整のやり直し、ロープの固定も一段と強くした。

ほぼ1年間にわたる準備期間を経てようやく本番を迎えたが、私の仕事はこれまでで、あとはスタッフにお任せ。中継車の中でモニターを見ながら、ただただ早く2時間半が過ぎるのを待っていた。

RKBの移動車に搭載した最新鋭防震装置はこれまでにない安定した画面で視聴者の目をレースに釘付けにした。レースは招待選手のみ、神戸製鋼・喜多、武富の両選手が40キロ付近から息づまるデッド

ヒートを演じ、まるで陸上短距離レースを思わせるような0・3秒距離にしてわずか1・5メートル差でゴール。喜多選手が見事武富選手を振り切つて優勝した。私は早く終われと祈るような気持で、あと5分、あと1分、5、4、3、2、1。ハイ後CM、やった！

RKBの古賀プロデューサーと「大成功おめでとう」、がっちり握手した、あの時の気持は25年が経つた今でも忘れられない。

すべてが終わり、撤収作業しながら、NHKのラジオ中継スタッフから「おめでとうヤッタね、大成功ですよ」と言われ、私は内心「ザマーミロ、民放だってやれば出来るのだ」と呟いた。多くの人がから大変でしたねと声を掛けられたが、中でも前述のマンシヨンの管理人の娘さんから「マラソンのテレビがこれほど大変な仕事とは知らず貴方と貴方の奥さんに変大失礼しました」と、お詫びにと菓

子箱を戴いたのが嬉しかった。やはり渡る世間には鬼はいなかったと思つた。

26年前の映像を今見ても、映像乱れがあるとドキドキする。当時の視聴者の方が私たち技術スタッ

フより寛容で、多少映像乱れがあったほうが臨場感があつて面白いと言われ、なるほどそんな見方もあるのだと逆に我々が教えられた。私たちが別大毎日マラソンのテレビ中継の口火を切つて以来、続々と各系列で中継が始まり、翌年から毎年のように各局から見学者が来られた。しかし多くの人が機材のことばかりに関心を寄せ、事前準備の大切さを知る人は少なかった。マイク口中継点の確保が出来れば、マラソン中継は80%出来たようなもので、あとはスタッフが解決すると話すと、はじめて理解出来た様子だった。

しかし今ではそれもすべてデジタル技術が解消してしまった。我々はマイク口受信点を13カ所、FPUも40セット近く使ったが、今ではデジタルFPU化1カ所ではほぼカバー出来る。まさに昔日の感。

TBSの石井智アナウンサー、RKBの古賀猪之助、OBSの加藤健夫両プロデューサー、技術スタッフの何人かが鬼籍に入り、歳月の経つのを感ぜさせる。

数年前、当時の中継技術スタッフのOB会を大分で開催し、俺たちが民放のマラソン中継の道を開

いたと言う男達が集まった。マラソン中継という目的に結集して抜群のチームワークを発揮した4局のメンバーが揃えばいまでもマラソン中継が出来そうな感じがする。意外なことに、中継技術スタッフが一堂に集い、親しく酒を飲み交わしたのはこの時が初めてだった。この稿を書くにあたり当時の写真を探したがどこにも無かった。真を探したがどこにも無かった。当時記録写真など残すことも、メンバーが集まり酒を飲む余裕すらなかったのが実情だった。

◇—◇—◇

終わりに民放初のマラソンテレビ完全生放送にたずさわった主なスタッフを紹介する。

TBS	プロデューサー	杉田 秀男
	ディレクター	猪俣 修二
		吉岡 道幸
		村田 栄二
		水株 宏
		石井 智
		多田 護
アナウンサー		
技術		
CTP		山本 浩
TP		岩淵 輝雄
TD		妹川 健
		他二五名

RKB

プロデューサー 古賀猪之助
ディレクター 藤井 洗二

高瀬 忠

木塚 健

大村 公雄

アナウンサー 杉山 明男

技術 隈部 崇之

TP 森田 浩康

魚住 久明

他二〇名

RKB

技術 藤江 全良

TD 他四名

OBS

プロデューサー 加藤 健夫

ディレクター 杉田 吉成

井尻 知彦

他六名

放送本部マネージャー

清水 隆夫

梅木兜士弥

三家本 稔

木村 道義

技術

TP 塩月 清

TD 続 憲二

他一八名